アマリリス
Amaryllis
静岡県立美術館ニュース
THE JOURNAL OF SHIZUOKA PREFECTURAL MUSEUM OF ART

曽宮一念《梨畑道》
キャンヴァス、油彩
五九・〇×七一・五㎝
大正十三（一九二四）年

東京美術学校に在学中の大正三（一九一四）年の暮れ、美校後輩で日本画専攻の井上恒也に誘われて、曽宮一念は富士郡田子浦村の彼の実家を初めて訪れた。

田子浦村は、曽宮自身が「村全體(ぜんたい)が眞平(まったいら)で最も畫(え)に成りにくい土地であった。」と語るように、田圃と梨畑があるだけの長閑で何の変哲もない土地だった。しかし、大正六年以降も、曽宮はこの地を度々訪れ、一見平凡なその風景の折々の変化を楽しんで、「おれの仕事は梨畑を描くことにあり」と言うほど、梨畑の連作に自らの心象を重ねていった。

画面は、大きく空と大地とに分けられ、小道が奥へと走っており、整然と打たれた棒杭が遠近法に従って視線を奥へ導く。一方で不揃いに突き出した棒杭が、遠近法に流されるのを阻み、単調になりがちな構図にリズムをもたらしている。

（上席学芸員　泰井　良）

No. 139
2020年度｜秋｜

鈴木祐一『義手足纂論』という本について

館長　木下直之

この『アマリリス』が出るころ、当館では「富野由悠季の世界」展が開かれ、大勢のガンダム世代が足を運んでくださっていることと思います。

アニメ「機動戦士ガンダム」がテレビ放映されたのは一九七九年から翌年にかけて、二〇代半ばだった私は、アニメはおろかテレビさえ見ない時期でした。その時代の芸能人やキャラクターが私の人生からすっぽり抜け落ちています。

それでも今から十年前、当館で開かれた「ロボットと美術」展（二〇一〇年）を見た帰りに、東静岡駅前で開催中だった「模型の世界首都 静岡ホビーフェア」に立ち寄りました。高さ一八メートル、等身大の機動戦士ガンダムがそびえ立っていたからです。

当時の私は男性裸体彫刻を追いかけ、その股間表現の分析に熱を上げていましたから、当然、ガンダムの真下から股間に向かってカメラを構えました。しかし、ガンダムはモビルスーツなんだ、だから裸じゃない、と教えられ、うーんと唸ってしまいました。

股間などにうつつを抜かさず、人間の身体能力の拡張という問題を探った方がよさそうです。

「富野由悠季の世界」展では、富野さんの父上が戦時期に開発に携わったという与圧服にも光が当てられています。戦闘機パイロットの高高度での活動を可能にしようとしたものですが、与圧服も、それを着て乗り込む戦闘機もまた、モビルスーツだといえそうです。

今の私は義足を追いかけています。義足は身体能力の回復を目標にしますが、拡張の可能性を秘めています。義足を見せたがらない時代が長くありました。ところが、障害者スポーツの興隆で状況が一変、今年予定されていた東京パラリンピックがさらに追い風となり、義足は見せるものへと変わりました。立つ、歩くから、走ることも可能になったのです。

当館で開催した「蜷川実花展」（二〇一七年）に「アンピュティモデル」(amputee は切断者の意）という義足の女性GIMICOを写した写真が展示されていました。リオパラリンピック閉会式での大会旗引き渡しセレモニーに登場して一躍知られることになった義足モデルです。

これを「義足の可視化」ととらえるならば、もはや障害者スポーツの世界にとどまらない広がりを見せています。

日本の社会で義足がどんな歴史を歩んできたのかを振り返る中で、鈴木祐一『義手足纂論』（南江堂書店、一九〇二年）という不思議な本に出会いましたので紹介しましょう。静岡県ゆかりの人物だからです。

鈴木祐一は一八七二年に大井川の上流、上川根村千頭に生まれました。生家は茶、椎茸、山葵を商い、祐一は二〇歳を過ぎたころに千頭壮年義会の会長を務めるなど、青年会活動の中心にいました。いわば農村改善運動に力を注ぎ、のちに上川根村の村会議員、村長にまでなっています。

一五歳の時のちょっとした事故がきっかけで右足が不自由になり、二一歳で切断手術を受けました。それは一八九四年夏、日清戦争が始まろうとする時です。執刀医は順天堂大学の佐藤進軍医総監でした。

佐藤の勧めで、浅草蔵前の遠州屋石代重兵衛に義足の製造を依頼しました。屋号が示すとおり、石代もまた静岡県磐田の産、医療器具の輸入販売に従事していましたが、西南戦争を機に義足の製造を手がけるようになりました。

戦争が負傷者を生み、その治療が医学を発展させるという関係にあり、それで義手義足の技術開発も進みました。しかし、装着を余儀なくされたひとびとの意識改革は、となると、もともと青年会活動に熱心だった鈴木祐一のような強いリーダシップの持ち主を必要としました。装着者に向けて、前向きに生きることを呼びかけた前代未聞の本がまるで百科事典のようなこの『義手足纂論』なのです。

郷里に戻った翌年春、大本営が置かれていた広島になんと天皇をアポなしで訪ね（もちろん拝謁叶わず）、陸軍予備病院では入院患者を前に義足で歩いて見せました（その顛末は「天機伺并軍人慰問録」と題して本書に収録）。そして、富士山登頂を二度にわたって果たしています。義足の人鈴木祐一は驚くべき行動の人でした。

今、「ロダン体操」について、美術鑑賞について思うこと

美術家　高橋　唐子

ある日、美術教諭の友人から、ネットでロダン体操が話題になっている、と動画付きのメールが送られてきた。もう一五年以上前に創作した作品だっただけに、非常に驚いた私は、すぐさまサイトを再生した。

その連絡を受けたのは世界中が不安の真っ最中にあった今年の四月、思わず「今は時期じゃないよ、色々大変なんだから。」と画面の中の自分に小言を言ってみたりした。

作品は時に、作家の思いと違う方向へ一人歩きすることがある。私の作品はほとんどがその類で、自分はむしろ、それを楽しむ節がある。誰か、偽物を作ってくれないかな、とか、私の代わりに体操をやってくれないかな、など自分の子供の様に作品の自立、成長を期待する。「物体」を残さない、それが自分の制作スタイルである。モノとしての存在はないかもしれないが、その時出会った人や時間、匂いや疲労までもが美術鑑賞とともに思い出される。いつだったか、高齢の方が私に一生懸命話をしてくれるのだが、テンポが速く頭が追いつかない。あっけにとられて動けなくなっている私を見てケケケと笑いながら「母の方言、わかった?ワークショップすごく楽しかったって言ってるのよ、でも体が痛いって。」と娘さんらしき人が説明してくれたことがあった。

私なんぞが言ったらおこがましいのだが、名画や名作をもっと多くの人に知ってほしいし、本物を見て体感してほしい。それが、私が制作を続ける所以である。人の作品、ましてや名作を題材にするなんてふざけている、新しい表現ではない、と幾度となくお叱りもいただいた。そうかもしれない。

学生時代、油絵科に席をおいていた自分は常に、世の中には溢れる程、名作や名画が存在するのに、これ以上必要あるのだろうかと真剣に考えた時期があった。そんなときに生まれたのが、新しい美術鑑賞。感銘を受けた作品を真似る、作る。作家と同じ材料で、同じサイズの道具を使って、同じ作業服で、同じ型になって徹底的に真似る。肉体を使った制作の過程に見えたもの、それを誰かに伝えられたら。

美術館へ足を運んで欲しいから作成した体操が、今は逆、美術館へ出かけられないという理由で脚光を浴びたことは意外であった。ロダン体操は、画面を通してひとり体を動かしているようであるが、多くの人と鑑賞を通して繋がり、一緒にイメージを膨らませているようである。私が中東で学んだ「何もなくとも詠え、踊れ、想像しよう、芸術は身を、助く」それと似ている。刺激的な毎日でなくとも、私たちを救っているものは簡単な事であり手に届く〝芸（わざ）〟なのだと、この半年で改めて実感した。

さて、これから美術鑑賞はどうなるのだろうか。また、いつ美術館が臨時休館になってしまうかわからない。けれど私たちは〝術（すべ）〟を知っている、歌おう、踊ろう、創造しよう。芸術は身を助けてくれる、かもしれない。

東京都現代美術館　春のワークショップ2016　カラダ・フィルター!!スイッチON!
「カラダを通してみる美術」より
企画・指導：高橋唐子
会場：東京都現代美術館
撮影：川瀬一絵

美術家　高橋唐子（たかはし　とうこ）
静岡県浜松市生まれ。二〇〇三年、静岡県立美術館「静岡NEWART展・わたしの居場所」にてロダン体操を創作、各地で名作の新しい鑑賞方法を提案。二〇一三年から二年間JICA青年海外協力隊にてヨルダンへ美術隊員として派遣、主に国連パレスチナ難民救済事業機関（UNRWA）の中学校にて活動を行った。身体を使った鑑賞方法をテーマに活動、現在に至る。

パラレル・ヒストリーズ
現代アートの諸潮流

2020年11月21日（土）〜
2021年１月11日（月・祝）

当館は、収集方針の柱の一つとして現代アートを位置づけており、今では四五〇点を超える現代アート作品を所蔵しています。本展では、それら所蔵品や寄託品を精選し、現代アートの流れをご紹介します。

そもそも「現代アートとは何か」と問われても、一概には答えづらいものではあります。表現方法やテーマなど、様々な領域に広がり、また重なり合っているからです。あるいは、時代で区切るとしても、どの年代で分けるべきか、視点によって異なってきます。

仮に、現代アートを「戦後に現れた新しい傾向」と、ゆるやかに捉えることとします。そうすると現代アートは、すでに七十五年の歴史を持っていることになります。歴史的なスパンでは、長くはない期間かもしれませんが、その間に様々な作品が生み出されました。そうした中、かつては存在しなかった素材や表現方法、発表場所との関係性など、次々アートは更新されてきました。

本展は、百花繚乱な現代アートの歴史を一本道として描き出すのではなく、六つのテーマを設けて交通整理をし、複数の流れがより合わさったものとして展示構成します。現代アートの主要な動向や当館コレクションの内容をふまえて、下記のテーマ、すなわち「絵画という難問」、「空間とのかかわり」「地面と重力」、「アートの断捨離」、「見ることの不思議」、「テクノロジー」を設定しました。

具体的な出品作品をいくつかピックアップしてご紹介しますと、ジョアン・ミッチェルの《湖》（図１）は、一九五八年、国内外の新しい絵画を紹介すべく、日本全国を巡回した「新しい絵画世界展」に出品された作品です。「絵画という難問」のコーナーでは、当作品や同時代の絵画から近年の新しい具象的な絵画まで、一つのジャンルに絞って通覧いただきます。

図１　ジョアン・ミッチェル《湖》1955年頃 当館蔵　©Estate of Joan Mitchell

また、静岡にゆかりのある作品を例にあげますと、「空間とのかかわり」のコーナーにおいて、川俣正の《袋井駅前プロジェクト１９８８》（図２）を展示します。川俣は建築的なインスタレーションで知られており、この作品は、袋井駅前にあった赤れんが建築の旧・駿河銀行袋井支店取り壊しの際、現地で制作、設置されたプロジェクトのドキュメントや模型などからなります。この時、川俣の作品以外にも、作品展示やイベントなどが実施されています。

「見ることの不思議」では、静岡の前衛美術グループ「幻触」や静岡出身の大庭大介の作品などを取り上げます。前者のだまし絵のようなトリック的表現や、後者の光を反射する特殊な画材を使った作品を、現代アートを切り拓いた先行世代と、そうした歴史を踏まえて制作する世代の表現の違いとして比べてみるのも面白いでしょう。

図２　川俣正《袋井駅前プロジェクト1988》1988年　当館蔵　Courtesy of Art Front Gallery

当館はこれまでも現代アートのコレクションを様々な展覧会で公開してきましたが、本展は、それらをまとまった形でご覧いただける稀少な機会となっております。この機会にご来場いただき、現代アートの魅力に触れていただければ幸いです。

（上席学芸員　植松篤）

移動美術展

沼津会場：
2020年10月22日（木）～11月3日（火・祝）

焼津会場：
2020年11月10日（火）～11月25日（水）

静岡県立美術館では、東西に広い静岡県において、当館から遠方の地域にお住いの方々にも、コレクションをお気軽にご覧いただけるように、これまで移動美術展を県内各地で開催してきました。

今年度は十月下旬から十一月下旬にかけて沼津市と焼津市、二つの会場で開催します。両会場に共通する出品作品も一部ありますが、全体としてはそれぞれの地域に合わせた展示構成となっています。

沼津市民文化センターでは「広重・大観・ロダンが沼津にやってくる」と題し、その名の通り、横山大観（一八六八年－一九五八年）の《富士山》やオーギュスト・ロダン（一八四〇年－一九一七年）の《考える人》など、当館コレクションから、高い知名度を誇る作家の作品の数々を最初にご覧いただきます。

次に、地元の沼津や伊豆の風景を題材にした近現代の風景画や、三島市出身の栗原忠二（一八八六年－一九三六年）や韮山出身の柏木俊一（一八九四年－一九七一年）といった沼津周辺ゆかりの画家たちの作品など、地域に根差した絵画を取り上げます。

最後に、沼津の版画として、江浦（えのうら）にアトリエを構え、晩年まで制作をつづけた木版画家・山口源（一八九六年－一九七六年）の作品をご覧いただきます。展示予定の代表作《能役者》（図1）が、沼津市民文化センター小ホールを飾る緞帳のデザインに使用されるなど、今も地元で愛されている作家です。また、歌川広重（一七九七年－一八五八年）《東海道五拾参次（保永堂版）》より沼津や原といった宿場町を題材とした場面を展示します。

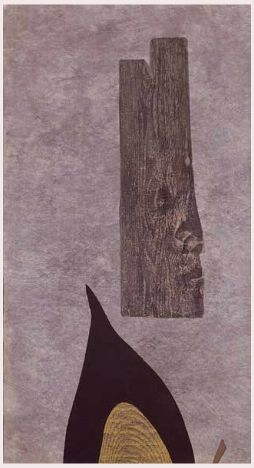
図1　山口源《能役者》1958年　当館蔵

焼津文化会館で開催する「石田徹也を中心に」は、焼津市出身で夭折した画家・石田徹也（一九七三年－二〇〇五年）の作品をメインとした内容です。現代社会における孤独感や不条理を生々しく表現する作風は、多くの人々の共感を得て、これまで国内各地で展覧会が行われてきました。更に昨年はスペインのマドリードとアメリカのシカゴで展覧会が開催されるなど、国際的な評価も高まっています。今回は《居酒屋発》《無題2》（図2）をはじめとした六点をご覧いただきます。

そしてもう一点、焼津市ゆかりの作品として、近年当館の所蔵となった、島田市出身の北川民次（一八九四年－一九八九年）が焼津市と藤枝市の境にそびえる高草山を描いた《山村初春（高草山風景）》を、他の民次作品とともにご紹介します。このほか、沼津会場と同じく大観やロダンの作品なども展示予定です。

図2　石田徹也《無題2》1997年頃　当館蔵

いずれの会場においても入場は無料です。近隣にお住いの方々はこの機会にぜひご覧ください。

（主任学芸員　浦澤倫太郎）

基本情報

「静岡県立美術館移動美術展　広重・大観・ロダンが沼津にやってくる」

会期：
十月二十二日（木）－十一月三日（火・祝）
会期中無休
開館時間：午前十時－午後五時
会場：沼津市民文化センター　展示室
〒四一〇－〇八三二
静岡県沼津市御幸町十五－一

「焼津市文化センター開館三十五周年記念事業　静岡県立美術館移動美術展　石田徹也を中心に」

会期：
十一月十日（火）－二十五日（水）
休館日：
十一月十六日（月）、二十四日（火）
開館時間：午前九時－午後五時
会場：焼津文化会館
〒四二五－八五八五
静岡県焼津市三ヶ名一五五〇
（焼津市文化センター内）

新出作品紹介：芸術家財団所蔵 ラファエル・コラン作《木の精》

前学芸課長　三谷理華

パリ八区に本拠地を置く芸術家財団(Fondation des Artistes)は、主に現代芸術の振興を目的として、一九七六年に二つの財団を統合して結成された。サロモン・ド・ロチルド(ロスチャイルド)財団とスミス＝シャンピオン財団がそれに当たるが、後者設立のきっかけを作った人物の一人、マドレーヌ・スミス＝シャンピオン(一八六四－一九四〇)は、長くラファエル・コラン(一八五〇－一九一六)に師事していた女流画家である。マドレーヌは一九一三年、姉のジャンヌとともに、愛書家であり浮世絵など美術工芸品の収集家でもあった母方の伯父故アレクサンドル＝オーギュスト・ルズエフのコレクション、およびそれを管理する図書館兼美術館とその運営資金を、フランス国立図書館に遺贈した。これを契機にパリ郊外に開館したのが、国の所有でありかつスミス家私設の性格をも有したスミス＝ルズエフ図書館であり、スミス＝ルズエフ財団はその運営を目的として設立された。そして姉妹は自分たちが所有の美術作品も順次この施設に移したようで、これらは現在、芸術家財団に引き継がれている。

スミス＝ルズエフ図書館の保管であった二点のコラン作品を芸術家財団が所蔵するのもこの機縁による。このうち一点は、一八九三年のフランス美術家協会サロンと一九〇〇年のパリ万国博覧会に出品され、黒田清輝や岡田三郎助といった日本の洋画家たちも範例としたことで知られながらも、長く所在不明であった一八九二年制作の《眠り》。そしてもう一点は、二〇一七年に筆者が存在を知り、コランの作であると確認した《木の精(Hamadryade)》(図1)である。前者についてはすでに拙稿を発表しているため詳細はそちらに譲るとして[1]、本稿では、後者の紹介と若干の考察を行い、新出となるコラン作品をまずは知らしめる契機としたい。

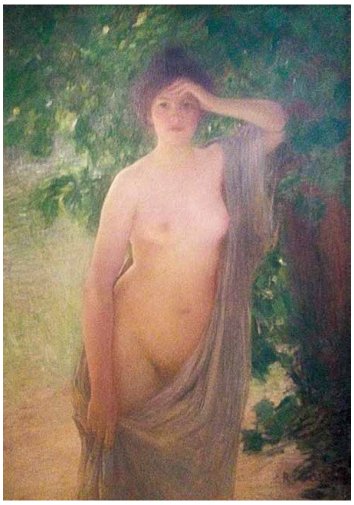

図1　ラファエル・コラン《木の精》
制作年不詳(1903年頃？)油彩・画布
130.5×90.5cm
パリ、芸術家財団蔵(同財団にて2017年2月筆者撮影)
© Fondation des Artistes/Rika Mitani

図2　ラファエル・コラン《静寂》
1903年　油彩・画布　132.0×90.0cm
画像提供：東京藝術大学大学美術館/DNPartcom

1. 基本データ

《木の精》は、画布に油彩で描かれ、作品自体の大きさは一三〇・五×九〇・五㎝で、額装されている。画面右下には「R.COLLIN」と署名があり、これ以外に年記等の記載はない。ただし本作品は、一九〇三年の作品で翌年サロンに出品された《静寂》(図2)と図像が酷似していることに鑑みると、ほぼ同じ頃の制作と推定される。

裏面には、木枠上に「No.2201」の記載があるが、これが何の番号であるかは不明である。また木枠上には貼紙も見られるが、こちらは明らかに一九一二年にロンドンで開催されたアングロ＝ラテン博覧会のフランス美術部門の出品票である。この展覧会は同年五月二五日から一〇月一九日まで開催され、出品番号二一番でコランの「木の精」と題された作品が出品されていたことが同展報告書に記されている[2]。添付されている出品票にも、作者欄にコランの名が、題名欄には「木の精」と記され、これらのことから本作品のタイトルを知ることができる。また出品票の所蔵者欄には「マックキャメロン氏」と記載があるが、これは恐らくコランの弟子であったアメリカ人画家、ロバート・リー・マックキャメロン(一八六六－一九一二)を指すと思われる[3]。したがって本作品は一九一二年にはマックキャメロンの所蔵だったのだが、この人物は同年

一二月二九日に急逝しており、所蔵者逝去直前の出品であったことになる。そして本作品が現在芸術家財団所蔵であることから逆算すると、この後、何らかの経緯で同門のマドレーヌ・スミス＝シャンピオンの手に渡ったと推測される。これに関する具体的資料は確認されていないが、スミス＝ルズエフ図書館の学芸員であったレオ・ムートンの一九三〇年一二月二二日付の報告書には、館内の絵画作品の中にコランの裸体像二点があると記されており、[4] 状況的にこれらは《眠り》と《木の精》とみられるため、この頃には同館に移されていたと考えられる。

2. 考察

《木の精》については、前述のアングロ＝ラテン博覧会以外の出品歴は現状では確認されていない。前述のように年記は無く、また下部の背景には塗り残しもあるため、あるいはコランはこの作品を完成作と考えていなかったかもしれない。とは言え、日本のものとみられる屏風を傍にアトリエで本作品を前にするコランを捉えた写真二点（図3、4）の存在は、コランが画家としてのアイデンティティの一端をこの作品に託した可能性を示唆してもいる。実際、絵筆を握るコランを写した写真の方は、日本の屏風から得たインスピレーションを画家が絵画化することで、《木の精》が生まれてきているとでも解釈できそうな画像となっている。そして、画家にとって何らか重要な意味を持つ作品であったからこそ、弟子である米国人画家の手に渡り、ロンドンでの博覧会にも出品されるに至ったのではないか。

　さらに《木の精》に関し興味深い点としては、《静寂》との酷似であろう。ただこれらの図像はよく似てはいるものの、前者は髪をまとめた若くほっそりした裸婦を描いているのに対し、後者はしどけなく髪をほどいた成熟した裸婦が描かれている。画家は様々な方向性の裸婦像を試す中で後者を選び取り、サロン出品作として仕上げたのだろうか。コランの裸婦は、十九世紀の間は多くは少女のような肢体で描写されるが、世紀が変わると豊満さを帯びるようになる。《木の精》と《静寂》の裸婦描写の差異は、裸体表現の転換期にあったコランの模索のさまを垣間見せると捉えることもできよう。コランは、三年後の一九〇六年、ピエール・ルイスの『ビリティスの歌』に静かな官能性が匂い立つような挿絵を提供し、それまでの若々しい「田園恋愛詩」の絵画世界とは一線を画すことになるが、そこへと向かう模索はすでに一九〇三年ごろには始まっていたとも考えることができよう。

　以上のように《木の精》は、とりわけ画家の晩年の作風を考える上で、興味深い考察の糸口を提示し得る作品と言える。この新出作品の存在がコラン研究の深まりに寄与できるよう、今後も努力を重ねていきたい。

図3　アトリエのコラン（推定　1903年頃）
BNF（Département des estampes et de la photographie）SNR-3 COLLIN（R）

図4　アトリエのコラン（推定　1903年頃）
BNF（Département des estampes et de la photographie）SNR-3 COLLIN（R）

1 拙稿「ラファエル・コラン作《眠り》（一八九二年）をめぐる考察」『デアルテ』［九州藝術学会誌］第35号、二〇一九年六月二八日、pp.141-159。

2 *Exposition Anglo-Latine, Londres 1912, Section française, Rapport Général*, Paris, Comité français des Expositions à l'Étranger, 1913, p.71.

3 マックキャメロンについては、拙稿「未刊行資料：ロバート・リー・マックキャメロン著「ラファエル・コランの芸術」をめぐって」（『静岡県立美術館紀要』第35号、静岡県立美術館、二〇二〇年三月、pp.13-37）も参照のこと。

4 Bibliothèque nationale de France, archives administratives de la donation Smith-Lesouëf, dossier E87/21, Léo Mouton,《Rapport sur l'inventaire de la collection d'estampes de la Fondation Smith-Lesouëf à Nogent-sur-Marne, décembre 1930》

本の窓

木下長宏『ゴッホ〈自画像〉紀行』中公新書　二〇一四年

三七才で夭折したフィンセント・ファン・ゴッホ。彼の画家としての人生は、僅か十年余に過ぎませんでしたが、この間、二千点を超える多くの優れた作品を世に残しました。しかも実に、その内の四〇点が自画像だったのです。

　本書は、ファン・ゴッホの作画活動をその生涯とともに追いかけながら、彼が影響を受け、そこから着想を得た西洋美術や日本美術を紹介しつつ、彼の自画像の謎に迫るものです。

　なぜ、ファン・ゴッホは、これほど多くの自画像を描いたのでしょうか、そして彼はそこに何を見出したのでしょうか。思想史としてのファン・ゴッホ研究を続ける著者が、自画像一点一点を生涯とともに辿っていく、美術史研究としても大変興味深い一冊です。

（上席学芸員　泰井　良）

博物館実習日誌

総務課　主査　金原　功

ここ二年、博物館実習の「総務課の仕事」という講義を受け持ちました。総務課の仕事といっても、人事、予算・経理から施設管理に至るまでその範囲は広く、一コマで話せる内容でありません。そのうえ、つつがなく業務が進行していくこと、数字が合うことが重視される類いの職種なので、学生が興味を示すような面白さに欠けるのも事実です。いろいろ考えた末、総務課が行っている仕事の概略と、予算と財務には厳格なルールがあることを伝えることにしました。

昨年は、書画カメラで会計書類を見せたり、テレビドラマのワンシーンを見せたりして、行政の事務手続きを説明しました。自費で行えば簡単なことが、複雑な手続きを踏まなければならないことや、民間企業では認められている事後精算も認められないことを伝えるべくいろいろな方法を試しましたが、自身が納得できる出来ではありませんでした。

そこで、今年は、マスコミ共催の「みんなのミュシャ」展の会期中であったことから、県直営方式とマスコミ共催方式の違いに触れながら、目下の懸案であるコロナ対策にどのように取り組んでいるかを伝えることにしました。県直営では難しい対策が、マスコミ共催方式だったゆえに早急に対応可能であった事例などにも触れ、県と民間のルールの違いを認識し、事態にあたっていることを話しました。

話題のトピックを織り込んだので昨年よりはよかったのかなと手応えを感じつつ、私自身、大学で学芸員資格を取得しましたが、座学で習った細かい内容はあまり覚えていないので、受講した学生たちの記憶に残っているかというと、極めて難しいと思っています。

それでも、予算や財務のルールを知っていると、学芸員の仕事に説得力や応用力が出るのは間違いありません。美術館に五年間勤務している学芸員資格を有する事務職として、博物館勤務を目指す学生に伝えたい極めて大切なことのひとつです。伝えるよい方法が見つからず、思うような進め方ができなかったので、次の機会をぜひ、と思うものの、定期異動が宿命の事務職には難しいことです。

利 用 案 内

開館時間：10:00〜17:30（展示室への入室は17:00まで）
休 館 日：毎週月曜日（月曜祝日の場合は開館、翌火曜日休館）

ア ク セ ス

◎ＪＲ「草薙駅」県大･美術館口から静鉄バス「県立美術館行き」で約６分
◎静鉄「県立美術館前駅」から徒歩約15分またはバスで約３分
◎東名高速道路　静岡I.C.、清水I.C.から約25分　日本平久能山スマートI.C.から約15分
◎新東名高速道路　新静岡I.C.から約25分

ウェブサイト：http://www.spmoa.shizuoka.shizuoka.jp

※イベント等は都合により変更になる場合があります。

〒422−8002　静岡市駿河区谷田53−2
総務課／Tel 054−263−5755　Fax 054−263−5767
学芸課／Tel 054−263−5857　Fax 054−263−5742

静岡県立美術館
Shizuoka Prefectural Museum of Art

つながる、次へ

新型コロナウイルス感染症拡大防止のためのお願い

【来館について】

- マスク着用の上、ご来館ください。
- 以下のお客様につきましては、来館を控えていただきますようお願いいたします。
  - 発熱や風邪、味覚障害の症状がある方（展示室内で激しく咳き込まれるなど、風邪のような症状のある方には、スタッフがお声がけし、ご退館をお願いする場合がございます。）
  - ご家庭や職場、学校など身近に新型コロナウイルス感染症の感染者もしくは感染の可能性のある方がいらっしゃる方
  - 体調がすぐれない方
- こまめな手洗いやアルコール消毒液などでの手指消毒の徹底をお願いいたします。
- 感染防止のため、壁や展示ケースに触れないようお願いいたします。
- 作品を観賞される際は、他のお客様と距離を空けて観賞いただきますようお願いいたします。また、展示室内での会話はお控えください。
- 展示室内の人数が多数となった場合、入場制限を行う場合がございます。

【サービスの休止等について】

- 託児サービスは、令和3年3月31日まで休止します。
- 休憩室は、当面の間閉室します。
  ※水飲み機（ウォーターサーバー）も休止しているので、館内で水分を摂ることはできません。
- フリートーキングデーは、当面の間休止します。

※事前に開館の状況をホームページ等でご確認ください。

友 の 会 の ご 案 内　入会は常時受け付けています。会員特典など詳細は、友の会事務局（Tel.054-264-0897）にお問い合わせください。

静岡県立美術館ニュース『アマリリス』No.139　編集発行：静岡県立美術館　2020年10月1日　印刷：文光堂印刷株式会社